

## 「熊谷次郎直実公銅像」の建立

昭和46年秋、熊谷市観光協会役員の堀口熊五郎、鎌倉幸男、清水康雄の三氏が銅像建立を発案したことに始まる。また同時期には、熊谷市文化連合が『伝記 熊谷直実』の編集を進めるなど、地域の偉人「熊谷次郎直実」の顕彰に対する関心が高まりを見せていた。

こうした中、熊谷市観光協会と熊谷市文化連合の有志は、熊谷市の黒田海之助市長に対して銅像建立の要望を提出した。翌47年、黒田市長は市内各種関係団体を招集、協議の結果、実施組織を準備することとなり、同年「熊谷次郎直実公銅像建設協賛会」が結成された。会長に近藤義次氏、副会長に千島勲氏、日向清次氏らが選出された。

後世に残す銅像の制作者について検討を進めたところ、当時、彫塑界の最高峰と称されていた文化勲章受賞者で、長崎平和記念像の制作者の北村西望氏に委託することになった。なお、北村西望氏は、秩父郡矢那瀬（現在の長瀬町矢那瀬）に疎開中、当時の波久礼駅長を務めた吉岡嘉平氏との交流があったことから、同氏の紹介により昭和47年11月8日、協賛会幹事が、井の頭公園近くの武蔵野市の北村氏アトリエを訪問した。そして、銅像建設について依頼した結果、快諾を得たことから、直実公像の建立に向けての動きが加速した。

建立に際しての募金は有志各団体の理解と熱心な協力で予定額を突破した。寄付者数約3,000名で、寄付総額は2,600万円を超えた。また建立位置について検討し、市議会に請願したところ、設置箇所は拡張された熊谷駅前広場と決定した。昭和48年夏頃から北村西望の原型製作が始まり、その後の鋳造を経て、昭和49夏から現地での建立に向けての準備が進められた。同年10月19日、熊谷氏の子孫にあたる熊谷雅子氏らの手により除幕が行われた。

像高3.07m、横幅3.63m、台座の高さ2.31m、横幅4.29m、奥行2.1mで、台座には「熊谷の花も実もある武士道のかおりやかし須磨の浦風、九一寿 西望塑人」のレリーフが嵌込まれている。



## 北村西望（きたむらせいぼう）の経歴

明治17年（1884）12月16日生～昭和62年（1987）3月4日

彫刻家。熊谷直実像、平和の女神像彫刻者、明治17年、長崎県有馬町白木野（現在の南島原市）に生まれる。同40年、京都市立美術工芸学校彫刻科、45年、東京美術学校（現在の東京藝術大学）彫刻科卒業、大正4年11月、第9回文部省美術展に「怒濤」を出品二等賞、5年11月第10回同展「晩鐘」を出品し特選。6年第11回文展に「光にうたれる悪魔」が推薦となる。8年第1回帝国美術院展審査員となり以後歴任する。10年、東京美術学校教授、従三位勲四等に叙される。14年、帝国美術院会員（現日本芸術院）となる。昭和19年、東京美術学校を退職し曠原社を設立。20年4月より秩父郡矢那瀬（現在の長瀬町矢那瀬）にある高德寺に約3年間疎開する。21年、文部省主催日本美術展（日展）開催、「平和への出発」「婦人解放の唄」等を制作する。30年、長崎平和記念像制作、その原型及び全作品300余点を東京都に寄贈。33年11月、文化勲章受賞、社団法人日展を創立し第一回展に「人類の危機」を出品。37年、武蔵野市名誉市民となる。40年、日本芸術院第一部長となり、44年、社団法人日展会長、45年、社団法人日本彫刻会名誉会長となる。47年、長崎県島原城跡に西望記念館完成し作品78点を寄贈。48年、大阪城公園へ「世界連邦平和像」を制作。49年5月東京飛鳥山公園に「日中友好アジア平和の女神像」を制作。49年10月矢那瀬疎開当時秩父鉄道波久礼駅長吉岡嘉平（旧花園村、現在の深谷市）の紹介により熊谷駅前「熊谷直実像」を制作、引き続き50年8月星川に戦災死者の冥福を祈る「戦災者慰霊の女神」を制作した。昭和62年（1987）3月4日に102歳で没した。死没の直前まで創作に励んでいた。

【主な参考資料 日下部朝一郎『熊谷人物事典』1982 図書刊行社、『日本美術年鑑』昭和62-63年版】

（報告：2018年11月3日）



## この碑(像) なんのひ

50

### 【熊谷次郎直実公銅像】

(熊谷市)

源平合戦での活躍で知られ、見守っている。

源頼朝が「日本一の剛の者」と絶賛した熊谷郷ゆかりの武士・熊谷次郎直実公(1141〜1207)の銅像。熊谷駅北口(正面口)ロータリーの中央にあり、馬にまたがり右手で扇をかかげた勇壮な姿で駅利用者ら

を、見守っている。地域の偉人に対する顕彰の機運が高まっていた1971(昭和46)年、熊谷市観光協会の役員だった3人が銅像の建立を提案。市長に要望すると銅像建設協賛会が結成され、約3000人から2600万円を超える寄付金が集まった。制作は長崎平和祈念像を手がけた文化勲章受章者・北村西望氏(1884〜1987)に依頼。1974(昭和49)年に完成し、直実の子孫らによって除幕が行われた。台座のレリーフには「熊谷の花も実もある武士道のかおりやかかし須磨の浦風 九一寿 西望塑人」と刻まれている。

参考/山下祐樹・金子兜太『熊谷ルネッサンス』(オーケードデザイン)